

第7回  
人と自然の共生国際フォーラム

The 7th international Forum on Interrelationship between Nature and Human Beings

子どもたちとともに考えよう、人と自然の共生  
For the Future of Earth, Think Together with Our Next Generation



【報告書】 2013.10.12 ±

(概要版)

地球市民交流センター(愛・地球博記念公園内)



主催／人と自然の共生国際フォーラム実行委員会(愛知県、瀬戸市、国際連合地域開発センター、愛知県国際交流協会、中日新聞社、名古屋大学、愛知県立大学、大学コンソーシアムせと、NPO法人海上の森の会、認定・NPO法人才の木、あいち自然環境団体・施設連絡協議会)

後援／総務省、環境省、経済産業省、農林水産省、一般財団法人地球産業文化研究所、一般社団法人中部経済連合会、名古屋商工会議所、独立行政法人国際協力機構(JICA)中部国際センター、東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林生態水文学研究所、愛知県森林協会、公益社団法人愛知県緑化推進委員会、愛知県森林組合連合会、一般社団法人愛知県農林公社、愛知県自然観察指導員連絡協議会、森林インストラクター会“愛”

## 開催報告

### 第7回 人と自然の共生国際フォーラム

The 7th International Forum on Interrelationship between Nature and Human Beings

人と自然が共生する持続可能な社会づくりを目指し、多くの方の参加と交流によりみんなで作る「人と自然の共生国際フォーラム」。第7回となる今回は、これまでを総括するとともに、次世代のために何ができ、何を伝えていくかを考えるため、第5回・第6回のフォーラム宣言にそって次世代のために活動を進めてきた6団体の活動発表や、グループディスカッション、特別講演、パネルディスカッション等を行い、子どもたちと一緒に人と自然の共生について考えました。

### テーマ：子どもたちとともに考えよう、人と自然の共生

9:25-9:30

開会宣言

9:30-10:40

アクション・プレゼンテーション

- 春に募集した、《次世代とともに人と自然の共生を考える新たな取組み》を実施する6団体による活動発表。

10:45-12:15

グループディスカッション

- 上記6団体のメンバーと一緒に参加者同士で、次世代のために、これからどのように行動していくかを話し合い、「私たちのフォーラム宣言」を作成。

13:00-13:15

開催の式典

13:15-14:45

特別講演

- 「百億人が地球に暮らすためには」  
講師：宇宙飛行士 毛利 衛

15:00-16:30

パネルディスカッション

- 「子どもたちとともに考えよう、人と自然の共生」  
コーディネーター：川井 秀一  
パネリスト：広田 奈津子、マイケル アラン ハフマン  
中日新聞社主催「地球未来こども塾」に参加した子どもたち(5名)  
伊藤 緋梨さん 今川 拓己くん 平野 智大くん  
唐井 彩衣さん 村田 直さん  
コメンテーター：マリ クリスティーヌ

9:30

16:00

市民のEXPO

16:30-16:40

閉会式

17:15-19:00

交流会



屋内広場と食の広場では、「市民のEXPO」と題して、様々な活動団体による体験ブースやポスター展示を展開したほか、2つのステージにて、外国の民族音楽の演奏や本の読み聞かせなど、アクション・プレゼンテーション発表団体の関連イベントが行われました。

## アクション・プレゼンテーション発表団体

- 1 ▶ 愛知工業大学
- 2 ▶ 愛知淑徳大学 学生団体エコのつぼみ(竹ガール\*竹ボーイ)
- 3 ▶ tre punte(トレ・プンテ)
- 4 ▶ 愛知県立大学多文化共生・学生ボランティアチーム
- 5 ▶ 世界と出会う絵本ひろばLooppe(ルププ)
- 6 ▶ 鎮守の森のなかまたち「もりのご倶楽部」

## あいち自然環境団体・施設連絡協議会(あいち自然ネット)

- 7 ▶ ジーフィールド
- 8 ▶ みどりのまちづくりグループ
- 9 ▶ 大府市自然体験施設二ツ池セレクトナ
- 10 ▶ 愛知県シェアリングネイチャー協会
- 11 ▶ 自然の叡智・撮り歩き隊
- 12 ▶ あいち海上の森センター
- 13 ▶ あいち自然環境団体・施設連絡協議会(あいち自然ネット)
- 14 ▶ 尾張自然観察会
- 15 ▶ NPO法人 親水会
- 16 ▶ NPO法人 東海自然学園
- 17 ▶ ネイチャークラブ東海
- 18 ▶ NPO法人 海上の森の会

## その他県内外の団体等

- 19 ▶ 樹恩ネットワーク
- 20 ▶ 公益財団法人愛知県緑化推進委員会
- 21 ▶ 愛知県環境部自然環境課
- 22 ▶ 愛知県森林保全課森と緑づくり推進室森林里山再生グループ
- 23 ▶ エシカル・ベネローブTV TOWER
- 24 ▶ クラタベッパー
- 25 ▶ ESDユネスコ世界会議あいち・なごや支援実行委員会
- 26 ▶ 公益財団法人日本生態系協会
- 27 ▶ COP10 SATOYAMA COMMUNITY NETWORK
- 28 ▶ 愛・地球博記念公園公園マネジメント会議
- 29 ▶ 株式会社豊田自動織機
- 30 ▶ 小林クリエイティブ株式会社
- 31 ▶ 中日新聞社
- 32 ▶ 南遊の会
- 33 ▶ 中部大学応用生物学部南基泰研究室・出光興産株式会社 愛知製油所
- 34 ▶ 愛知県緑化センター
- 35 ▶ 認定・NPO法人 才の木
- 36 ▶ 一般社団法人ガールスカウト愛知県連盟
- 37 ▶ 株式会社伊藤園







## アクション・プレゼンテーション

4～5月に、第5回・第6回のフォーラム宣言の内容にそって活動する事業を募集し、応募があった9件のうち、審査によって選ばれた6事業の活動団体に、活動発表をしていただきました。

### 木で創ろう、食卓の“和”！ ～里山でいただく自然の恵～

愛知工業大学

市街地で暮らす子どもたちは、里山や農地の姿を見て育っていません。また近年は単世代共働き夫婦の増加で、家族で食卓を囲むことなく寂しく食事をする子どもも少なくありません。そこで、この愛・地球博記念公園内で里山を再現する活動を行う「あいちサトラボ」で、子どもたちと一緒に国産杉材を材料とした食卓をみんなで力を合わせて製作し、地元名産の野菜を使った芋煮を囲み、食事を楽しみながら里山の仕組みを学ぶ取り組みを行いました。使用した木材は、木材を使った子どもの遊び場などに積極的に取り組む住友林業株式会社の協賛を得ております。このワークショップを通じ豊かな自然の中で人と自然が共存していく必要性を参加者と共有しました。



### 里山を身近に感じよう!! 里山保全、いつやるの、今でしょ!

愛知淑徳大学 学生団体エコのつぼみ (竹ガール\*竹ボーイ)

2010年のCOP10での里山イニシアチブの提唱から、実際に私たち学生が里山竹林整備をする活動をスタートしました。そして毎月各イベントにて、環境啓発のあるマイ箸づくりや竹炭消臭ポット作りといったワークショップを行い、次世代の子どもたちに繋げていくために開催しております。このように、私たちは学生目線で環境について考える活動を行っております。生物多様性が崩壊しないように、里山保全を目的としている団体の取り組みの事例について、情報などを収集して分析、そして情報発信をしています。伝統的な里地里山の利用管理仕様の再評価により、保全活用に繋がる新たな利活用の手法の導入を目指します。このようにして里地里山の保全活用を全体で促進していきます。



### アートあそびプロジェクト「森はアトリエ」

tre punte (トレ・ブンテ)

子ども(親子)を対象に、心と体を開放するアート+あそび体験の場を提供しています。今回は、海上の森を舞台にした「森はアトリエ」というプログラムを実施しました。私たちはプログラムを企画する上で、いろいろな立場の人に関わってもらうことを大事にしています。世の中には大人や子ども、障がいのある人やない人等、様々な人がいます。中には遊びを本気で楽しんでいる大人たちもいて、そんな大人(アーティスト)と一緒に、子どもが自由にのびのびと生きる場を創りたいと考えています。そして森は私たちが暮らす社会同様、いろいろなものが共生し育まれており、そこを訪れる人を大きく包んでくれる場所です。「森はアトリエ」は、そんな森の存在とリンクし、多くの人と楽しさを共有できたプログラムでした。



### 環境・多文化共生の国際交流

愛知県立大学多文化共生・学生ボランティアチーム

2010年のCOP10の時に先住民サミットを開催し、それ以来、国際交流のいろいろな活動をしています。今回は、多文化共生をどのように実現できるかを考えるため、イランでの体験を取り上げました。イランの人々と接したことによって感じられたのは、メディアの情報だけを基にイランの国についてイメージを持たないでほしいと彼らが願っていることです。多文化共生に必要なのは、私たちが持っている固定的なイメージを捨てて、新たに発見していく努力をすることでしょう。子どもは先入観をもたないため、お互いに人種や背景など関係なく仲良くできます。多文化共生を目指す私たちは、子どもの心を持つように心がけていくべきかもしれません。



### 絵本を通して世界と出会う!

世界と出会う絵本ひろば Looppe (ルブプ)

ルブプは、「絵本」という媒体を通して世界を感じ、国際理解を深めてほしいと結成されました。普段は毎月第4土曜日14時からJICA中部1階のカフェスペースで絵本の読み聞かせやワークショップを行っています。ルブプの読み聞かせは、多種多様な読み手、言葉で行っています。年齢も性別も様々な、個性あふれる読み手たちが活躍し、外国語の絵本はオリジナルの言語と日本語訳での読み聞かせを行います。また、世界には日本と違った暮らしをしている子どもがいることを考えるきっかけにもらいたい、「わたしとわたし」という絵本を作成しました。親子で日本の生活や海外の暮らしについて考え、自ら社会に参画する子どもたちがたくさん現れることを願っています。



### 自然育児および教育を考える会

鎮守の森のなかまたち「もりのこ倶楽部」

私たちは、子どもたちが一日のうちで大半の時間を過ごす学校・幼稚園での教育について考えてみようと思いました。新しい教育を考えるうえで、現在教育を受けている学生と、子育てをしている保護者が次世代について話し合う場を作り、未来の教育の形を提案していきたいと思えます。自然が豊かな場所で幼児期を過ごすことは、とても素晴らしいことです。これから生まれ育つ子どもたちのためにもっと自然を残してほしい。義務教育だけでなく、豊かな自然で過ごす独自の教育法の実践など、もっと人間的な心の発達を中心とした教育に変化していくために、学生が何を望み、何を考え、何を思っているかなどを、月に一度の話し合いやイベントで話し合い、それを発表し続けていこうと思います。





## グループディスカッション

ファシリテーター 広田 奈津子 (パネルディスカッション パネリスト)

国際音楽交流NPO環音(わおん) 代表の広田奈津子さんがファシリテーターとなり、参加者はアクション・プレゼンテーション発表団体のメンバーと一緒に4つのテーマに分かれ、次世代のためにこれからどのように行動していくかを話し合い、「私たちのフォーラム宣言」を考えました。宣言の内容はパネルディスカッションにおいて、広田さんから紹介されました(7～8ページ)。

### A. 里山をベースに、地域の中での循環や、地域同士のつながりのあり方を考える。



### B. 温暖化問題への対策や新しいエネルギーのあり方を考える。



### C. 海外の知恵や生き方に目を向け、国際的なつながりを考える。



### D. 先人の知恵に目を向け、世代を越えたつながりを考える。







## 「百億人が地球に暮らすためには」



講師：毛利 衛  
(宇宙飛行士)

1985年、北海道大学助教授から日本人初宇宙飛行士に選抜される。スペースシャトル・エンデバー号で、1992年日米協力初宇宙実験と宇宙授業、2000年高精細立体地図作成データ取得を行った。2003年、潜水艇しんかい6500での深海科学実験を遂行。同年、南極から皆既日食の世界初中生中継を行う。2007年南極昭和基地からタイ、オーストラリア、日本を結んで地球環境授業実施。現在はアジア太平洋地域科学館連携協会会長、日本科学未来館館長。専門は核融合材料科学、真空表面科学、宇宙実験。著書に「モマの火星探検記」（講談社）「宇宙から学ぶ ユニバノロジーのすすめ」（岩波書店）など多数。

### 講演内容要約（事務局文責）

今、地球上には70億人ほどの人間が生活をしている。数十年前は人口が30億人だったことを考えれば、飛躍的に地球の人口は増えていった。これからは、これまでのように人口が増えるだろうか。食糧不足、気候変動、地域紛争などあらゆる環境変化が人口増加に何らかの影響を与えるであろう。しかし、「百億人が住める地球」を意識して未来を考えることが重要だと思う。百億人が住める地球にしようとする物事を肯定的に捉えていくと、人と人、人と自然が共生する素晴らしい地球になるのではないかと考える。

私が宇宙飛行士を目指したのはガガーリンのニュースをテレビで観てからだだったが、同じ頃に北海道で皆既日食を観た。この時体験した不思議な感覚が、自然科学者になりたいという夢のきっかけだった。その後、宇宙飛行士となり、自然科学者として宇宙空間でいろいろな実験を行った。

宇宙から地球を見ていると、従来の二次元の地球の地図とは違うと感じた。国境がない。中心がない。端がない。どこまでも繋がっている。南極や北極の位置や大きさが違う。地域や環境に境目はない。すべてが繋がっている。それを理解すると、この地球を守るためには、地域や国のエゴを超えないと、何も解決できないことに気付くはず。今は、インターネットがあり、個人の考え方を地球全体に発信することができる時代。だからこそ、人と自然が共生できるみんなの知恵を、世界に発信していくことが大事だ。

地球には5,000万種もの生命がいるが、その生命の元となるゲノムはすべて繋がっている。人類の歴史を振り返ると、一万年前に農業が始まり、その後、いろいろな進化を経て人類は生き延びてきたが、その変遷のなかで環境を破壊してきたために、地球の将来が危ぶまれている。現在70億人の人間がいるが、地球上で百億人の人間が生きていくためには、この問題を解決しなければ成し得ることができない。今こそ、自分と他の生命、自分と他の国といったつながりを考えて、地球と人が共生できる取り組みを進めていくことが重要だと考えている。





## パネルディスカッション

### 「子どもたちとともに考えよう、人と自然の共生」

中日新聞社主催の「地球未来子ども塾」に参加した子どもたちとともに、人と自然の共生について議論をしていただきました。まとめとして、午前中のグループディスカッションの話し合いの結果も参考にして、コーディネーターの川井秀一先生によって「第7回（私たちの）フォーラム宣言」がまとめられました。



コーディネーター

**川井 秀一**

京都大学大学院総合生存学館 学館長  
日本学術会議 会員  
認定 NPO 法人の木の木 理事

日本木材学会会長、日本材料学会副会長等を歴任するなど、林産科学・木質工学の分野で数々の業績を残している。木材利用の普及啓発活動にも積極的に取組み、日本木材学会の「日本の森を育てる木づかい円卓会議」を前身とした「NPO法人の木の木」を立ち上げ、木づかい、森づくりの環境ネットワークづくりに取り組んでいる。



パネリスト

**広田 奈津子**

映画「カンタ!ティモール」監督  
国際音楽交流 NPO 環音（わおん）代表

音楽ドキュメンタリー映画「カンタ!ティモール」監督。1979年愛知県生まれ。幼い頃に親しんだ森が伐採され、そのショックをアメリカ大陸先住民に癒されたことをきっかけに旅を始める。2002年音楽交流を行う「環音」立上げ。先住民族に伝わる知恵に学び、紹介するべく、映画制作や交流活動を行う。



コメンテーター

**マリ クリスティーン**

異文化コミュニケーター  
あいち海上の森センター名誉センター長  
国連ハビタット親善大使

父親の仕事に伴い4歳まで日本で暮らし、その後ドイツ、アメリカ、イラン、タイ等諸外国で生活。単身帰国後、上智大学国際学部比較文化学科卒業。大学在学中に芸能活動も開始。94年東京工業大学大学院理工学研究科社会学専攻修士課程修了。今現在も都市工学を学んでいる。幅広い視点から国際会議・式典等の司会、講演活動を多数こなす。

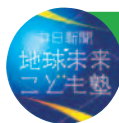


パネリスト

**マイケル アラン ハフマン**

京都大学霊長類研究所 准教授

1958年、コロラド州デンバー市生まれ。京都大学理学部動物学教室にて、修士課程（1985）及び博士（1989）を取得した。野外研究を中心として32年間ニホンザル、20年間タンザニアやウガンダのチンパンジーを調査してきた。最近では、研究を通じてスリランカ、ベトナム、台湾、インドなどで若手研究者の育成に力を入れている。



#### 「地球未来子ども塾」に参加した子どもたち



伊藤 緋梨さん



今川 拓己くん



平野 智大くん



唐井 彩衣さん



村田 直さん

#### ■川井

皆さんこんにちは。人と自然の共生国際フォーラムも第7回を迎えることとなりました。最初の第1回目から本日の第7回まで、私とマリさんがこれまで一緒に、様々な形で関わって参りましたので、一度皆さんとともに過去6回のフォーラムのパネル

ディスカッションを簡単に振り返りながら、私たちがこのフォーラムでどのようなことを考え、どのようなことをしようとしていたのかを考えていきたいと思います。

マリさんがおられますので、印象に残ったフォーラムについて、コメントをいただきたいと思います。

## ■マリ

毎回とても興味深いものばかりでしたが、あえて言うならば、COP10の年のフォーラムです。2010年の10月でしたので3月に大災害があると思ってもいなかったのですが、災害の起きる前から、いろいろな問題定義をさせていただけたと思います。やはり里山保全というのは、私たちが今、海上の森ですずと行っている最先端のことで、どうやって持続可能な社会を継続し、私たちの先祖から受け継いだものを今の時代に合わせた形で伝え、孫の時代まで地球を守り受け継ぐことをメッセージとして発信できたと思います。

川井先生が印象に残ったフォーラムはどの回だったのでしょうか。

## ■川井

私は、第5回の震災後に開催されたフォーラムがやはり大変印象的で、必ずしも明るいフォーラムではなかったですが、みんなが一緒になってこれからどうしようと真剣に考えたことを覚えております。

今日は次世代に向けて繋いでいく、そして、伝承しながら子どもたちにも考えてもらおうと、様々な取り組みをご紹介したいと思います。まず始めに、お二人のパネリストをお招きしたいと思います。おひとりとは広田奈津子さんです。広田さんは映画監督であるとともに、国際音楽交流NPO環音(わおん)代表でおられます。もうお一人は、マイケル・アラン・ハフマンさんです。ハフマンさんは、アメリカ生まれのアメリカ育ちですが、長く日本におられて、犬山にある京都大学霊長類研究所でチンパンジーの研究をしています。

## ■広田

私は幼少の頃に、よく遊んでいた雑草林が宅地開発で更地になっていく光景をみました。住んでいた動物の巣穴ごと更地になっていくのを見て、何が人間とその他の生き物を分けているのか分からなくて混乱してしまいました。高校を出た頃に出会った絵本がきっかけで大地を母と呼ぶ民族に会いに行きました。そこで諭され、先住民の方々に興味を持ち、いろいろ場所に訪ねて歩くようになりました。その中で東ティモールという小さな国の先住民は、隣国からの攻撃を24年かけて対話し続け、奇跡の独立を果たしました。一人一人が、次の世代に何を残し、どんな未来にしたいかを強く想うことというのは、決して

無力ではないと思いました。

アメリカのウォール街では、たくさんの人が集まり誰もが話し全員で納得して合意を作って行く様子がありました。誰が悪かったと言うのではなく、自分たちがどうしていくか、どう話し合っていくのか。そういった、みんなで意見を出し合い、話し合っていくプロセスがとても大事じゃないかと思います。

## ■ハフマン

私は絵本をきっかけに、小さい頃からサルが大好きでした。大自然に恵まれた場所で育ち、幼少期にはボランティアでチンパンジーとふれあうことも出来ました。大学進学時に日本への留学をきっかけに、京都から念願のサルの研究、その後タンザニアにてチンパンジーの研究が始まりました。その中で知り合った先住民たちは、自然の中で動植物と仲良く暮らしながら、植物で病気を治療するなど、いろいろな知恵を得ていることを学びました。

就職後は、いろいろ世界を回り様々な国の人たちと交流してきました。その中でいろいろな文化・体験をしてきた人たちが一緒に、それぞれの立場を提供して考えれば新しいものがまだ出てくるのではないかと思います。

「人と自然の共生」が成り立つためには、自然を大切にすることを子供に育て、自然界の素晴らしさを大切にすることを科学の楽しさに変え伝える。異文化に対する好奇心をもつことにより相互理解につなげ、科学の国際化の中で、より多様な世界観の統合を研究者に望む、などではないかと思います。こうしたことを次の世代、子ども達に期待したいと思います。

## ■川井

午前中にアクション・プレゼンテーション、それからグループディスカッションを行って、「私たちのフォーラム宣言」といったものを作り上げていただきましたので、それについてご紹介をいただき、そこから議論を続けていただきたいと思います。

## ■広田

午前中のグループディスカッションでは7組に分かれて、ディスカッションをしていただきました。「私たちのフォーラム宣言」ということで、これは、明日から具体的に実際自分が必ずする行動をそのグループで決めるというものでした。もちろん



その目的は次世代のためということです。

テーマは4つありまして、まず「里山をベースに、地域の中での循環や、地域同士のつながりのあり方を考える」ということで、1組目は「週に一度は家族で食卓をかこみ、一つ釜の飯を食べる」とても具体的で、これにはいろいろな意味が込められていて、地域の里山を守るために近場のお米を食べることだとか、食卓を囲んでコミュニケーションをとることで年長者から子どもたちに大事なこと、子どもたちから年長者にも大事なことが伝えられるのではないのか、そういったことが込められています。

2組目も同じテーマで、「やって満足する里山保全ではなく、やってどうなったかまでを調べる里山保全」このグループのみなさんはすでに里山の活動をされていますが、やって満足とちがちな活動ではなくて、ハードルが高いかもしれませんが、その後のアフターフォローまでちゃんとしていこう、とあえて挙げていただきました。

3組目も同じテーマです。「未経験者に自然体験ワークショップを行います」この方たちもすでに活動をされている方たちで、普段ワークショップを行っているのだけれども、あえて未経験者、今まで声をかけたことのない方たち、こういったことに興味がなかった層にも声をかけていきます、ということ宣言していただきました。

4組目も同じテーマで、「春夏秋冬好きな人と里山へ行く。そして汗を流す」ここはいろいろな世代の方が入っていたのですが、里山の大切さを守って次世代に伝えていく、そして自分でも間伐をするだとか、里山で農作業をするだとか、そういったことで汗を流す、そしてそれを好きな人と、例えばお孫さんだったり、妻だったり、彼氏だったり、そういう人たちとデート代わりに行くという、そういった宣言をしていただきました。

5組目のテーマは「温暖化問題への対策や新しいエネルギーのあり方を考える」。男性3名で話し合っていました。「飲み会の席、お茶会の席、その他、顔を見たら温暖化による影響を隣人に伝える」とても大切にアナログな、食べる席や飲む席で伝えていく、伝えた方からもまたその隣人に伝えていただくことを提案していこうという宣言をしていただきました。

6組目のテーマは「海外の知恵や生き方に目を向け、国際的なつながりを考える」フォーラム宣言が「子どもの目線で『おなじ』と『ちがひ』に気づく」大人がどうしても持っしまいがち先入観・偏見だとか、刷り込まれたイメージや自分で決めて

しまった概念ではなくて、子どもの目線、まっさらで真っ直ぐな目で人と向き合って、自分と同じところ、そして違うところに気づいていく、これから私たちは人に会うたびにその気づきをしていきますという宣言をしていただきました。

7組目のテーマは「先人の知恵に目を向け、世代を越えたつながりを考える」フォーラム宣言が「身近な人に聞き、身近な人に伝える。そして実行に移す」おばあちゃんとかおじいちゃんとか、身近な人がきっとたくさん宝物を持っていると思うんですね。そういう人たちに聞いて身近な人に伝える、姪っ子や甥っ子や子どもたちや近所の子どもたちや友達や、そういった人たちに伝えて、そして実行に移すということ宣言していただきました。

## ■川井

4つのテーマで7つの宣言をいただきました。直接民主主義的なアメリカの、いわゆるコンセンサスプロセスというのでしょうか、アメリカ人はむしろ苦手で、日本人が得意なプロセスではないかと思うのですが。

## ■広田

まさしくそうだと思います。ちょっと前まで村には必ず寄り合いがあって、解決しなければ三日三晩でも話し合うような土壌があって、まさに人間らしい政治システムではないかなと思うのですが、そのミニチュア版を今回ここでやってみました。

## ■ハフマン

アメリカではそういった方法は最近珍しいと思います。一方的に自分の意見を通そうとするところ、たぶん生活の仕方が変わってきている影響もあると思います。でも世界のどこを見てもこういうやり方はあると思います。それは、人がまだ一緒に同じ釜から飯を食うことこそ繋がりが強いということで、話し合えるところなんだと思います。

## ■マリ

やはり日本にはたくさん良い手法があるんですね。もちろん町内会とか隣組とかを嫌がる方がいるんですね。でもそういう意味での隣組じゃなくて、本当にお互い守り合いながら助け合う、この結び手間返しとかお互い様精神、それが日本語から世界の言葉にまだなっていないから説明ができてないですね。

おそらく、多言語の方々がそれをちゃんと自分の言葉で聞けたなら、これはすごくいいねって気持ちになると思うので、是非こういうことをもっと広めていきたいと思います。

#### ■広田

日本には、違う姿をした命への理解、コミュニケーションの取り方において、とてもすぐれた文化があると思います。言葉ではコミュニケーションはとれないけれども、それ以上の何かを伝え合うことだとか、先住民の人たちにも通じると思うんですけど、クマから薬を教えていただきたとか、そういったことです。もしかすると現代の私たちは言葉に頼りすぎて、目に見えるものだけを信じすぎて、本来はコミュニケーションがとれるところも、とれないと思い込んでいるかもしれないですね。

#### ■ハフマン

相手の言葉をしゃべらなくても、接し方が日本人は非常に上手だと思います。海外から研究所に初めて来る人たちはみんな驚くのですが、ここまで親しく、ここまで手伝ってくれることは、特にアメリカではあり得ないと思いますね。日本は島国だとかいうことは昔よく聞いたのですが、今はみんな世界中を回っている経験しているから、逆に日本人が持っている素質が、そのことでパワーアップしていくのではないかと思います。

#### ■マリ

来年この愛知・名古屋でESDユネスコ世界会議があります。持続可能な社会づくりのための教育というか、学ぶことだと思うんですけど、教育という少し上から目線なので、一緒になっているいろいろなことを考えるということがすごく重要だと思います。来年は、今まで皆さんがやってこられていることをそのまま続けることが大事なのと、それをもっと深く掘り下げていきながら、もっと浸透させていく部分があると思うのですけれど、先ほど紹介があった宣言の中にも、今後やっていく活動について、いろいろと盛り込んでいただけると嬉しいなと思って今日はすごく楽しみにしていたんです。

#### ■広田

世界最大規模の会議ですよ、環境に関する会議。まさしく、教育というよりも私も学び合い、コミュニケーションだと思いま

す。それが、この愛知でCOP10に続いて開かれる、150ヶ国以上の国の方が集まって、政府の方、企業の方、そしてNGOや市民の方たちも集まりますので、ぜひ良いものを共有して次に行けたらいいのかなと思っています。

#### ■ハフマン

自分たちが研究対象にしているサルたちの住まいがどんどんなくなっています。外から大企業が入ってきてその森を伐り倒してしまい、これから30年でオラウターンがいなくなるかもしれないという状況が迫っているのです。それを変えるために、研究者たちも研究ばかりではなくて、企業にどう立ち向かうのかという課題が出てきていて、京都大学の霊長類研究所では2年前、初めて保全という分野ができたわけです。これから自然を研究する人たちの重要な課題になってきています。

#### ■川井

今日は中日新聞社が主催した「地球未来こども塾」に参加された愛知県下の小学6年生の5名の皆さんにも来ていただいております。東海4県、愛知・岐阜・三重・静岡から150人が公募され、岐阜県の白川郷で夏休みに2泊3日の合宿活動がされました。皆さんはこの白川郷を巡り、勉強したことをミッションレポートという形でレポートにしておられますよね。まず「白川郷のここがすごい」と思うところをご紹介ください。

#### ■伊藤さん

4つありまして、1つ目は自然と一体化している、2つ目は大切なものを地域全体で守ろうとしている、3つ目は森を大切にしている、4つ目は、人と人との繋がりは“結い”というところです。合掌造りの屋根を葺き替える時に、村の人たちが200人ほど集まってみんなで一緒に屋根を葺き替えることが“結い”だと聞きました。

#### ■川井

自分の家を葺き替える時も、他の人の家の屋根も葺き替える時も、みんなが集まって協力してやる。「結ぶ」という字を書いて、やはり繋がりを意味しているのですね。

### ■平野くん

白川郷は、昭和や明治にも何度か火事あったのですが、それを乗り越えて1995年に世界遺産に登録されて、それは白川郷の人が住んでいたという理由のほかにも、村の人達の協力があったから世界遺産に選ばれたのだと思います。

### ■唐井さん

3つありまして、1つ目が、100年以上経っても人が住んでいるところ。自然で作っている建物なのに、100年以上も人が住み続けられるのがすごいと思ったからです。2つ目が、気候に合わせて建物のつくりが工夫されているところです。夏は涼しくて、冬は温かいように建物を工夫して作ってあるからです。最後は、合掌造りの建物に周りの自然を活かしているところです。普通の建物だと釘やコンクリートなどを使っているのに、この建物は釘やコンクリートを一切使ってないからです。

### ■マリ

ひとつ聞きたいのですが、明日から家族みんなでもう白川郷に移って住みましょうってご両親に言われたら、いかがですか。

### ■平野くん

1日や2日だったら、最初のほうは楽しんでいると思うのですが、ずっと住むことになると思うと、だんだんこの家大丈夫かなみたい感じで不安も出てくると思うんです。それに比べてみると、自分の家はコンクリートや鉄でできているところなので、安心して安全な家なのかなと思います。

### ■今川くん

僕は住んでもいいと思っていますが、民宿の人に聞いたのですが、食べ物を買うスーパーが近くになくてJAとかに買いに行かなきゃいけないということで、わざわざそういう場所に買いに行くなら、都会のスーパーがたくさんあるところに住んだほうが便利かなって思いました。

### ■ハフマン

最初の日は良いけど、後からいろんな不便を感じるというのはよくわかります。いろいろな体験をこれからしていくことで、どんな大変なことでも、どんな大変なところにおいても、自分

が住める、自分が気持ち良くいられる気持ちを持つのが大事、こういう体験をフルに活かして生きていてほしいです。

### ■川井

レポートの「今ある地球の宝物を未来に残すために何ができるか」について話していただけますか。

### ■今川くん

僕たちの班は、今ある地球の宝物を地球の自然と森と考えました。それを未来に残すためには、まずポイ捨てを禁止したり、自分たちの欲望で木を伐らない、生活を見直して、手を出した自然は責任を持って自分で管理することが大切。森はもちろん、水や生き物を大切にしたり、電気をこまめに消して、エアコンの温度は28度ぐらいにして、節電をすることが大切だと思います。

### ■村田さん

私たちが考えた今ある地球の宝物は自然です。未来に残すためには木を植えて森林率を上げる。木を使う時は最小限にして森林を大切に。ゴミはポイ捨てせずきちんと分別して、資源を大切に。食べ物は残したりせず、責任をもってきれいに食べる。買い物にはエコバッグを持って行き、本当に必要な物かを考え、買いすぎに注意する。このようなことを行い、地球温暖化をくい止め、知恵を使って生きてきた白川郷の人々のように、自然を大切に。限られた自然を愛して、未来にバトンタッチしていきたいと思いました。

### ■川井

ミッションレポートの最後に、「体験を通じて得た自分だけの宝物」という項目がありますね。150人もの小学生が2泊3日の生活を共にして、班を組んで、様々な体験をして得た宝物はこんな物だということ。順番に聞いていきたいです。

### ■伊藤さん

私が自分だけの宝物だと思ったのは、人と自然との繋がりです。白川郷の人たちは合掌造りの家に使う木とかの材料を、無駄には取らないようにしていて、これは自然を残すために大切なことだし、人と自然との繋がりはとてもいいものだったからです。



### ■今川くん

僕は白川郷の人々の優しい心が宝物だと思います。さっきも言っていたけど、屋根を協力して取り替える“結い”という文化が白川郷にあります。茅葺き屋根をみんなで力を合わせて取り替えるということは、みんなの中にやさしい心あって、知らない人でも助けたいという気持ちがあるからだと思ったからです。

### ■平野くん

僕は自分の意見が大切だと思いました。自分の意見を言うことによって相手にも自分の意見を分かってもらえるし、自分も意見をいうことで成長をしていけると思うので、そうしました。

### ■唐井さん

私の自分だけの宝物は大自然です。1日目に泊まった民宿の夜ご飯が山菜とかそういうものだったんですけど、白川郷の人たちは近くの山で採れた山菜とかそういうものを使っていて、自分の家とはほとんど違っているから、大自然はいいなと思いました。

### ■村田さん

私が見つけた宝物は、人々が私たちに残してくれた自然です。昔の人が助け合ってずっと大切にしてきた自然を、私たちも協力し合って未来に残していきたいと思いました。

### ■マリ

先ほど“結い”の話が出ましたが、もちろん白川郷みたいな生活は本当に大変ですし、白川郷の方々がああやって生活を守ってくれていることは私たちが尊敬することでもあるわけですけど、皆さんの生活の中で、“結い”を見たりすることはありますか。

### ■村田さん

私が見つけた“結い”は、地域で活動することです。

### ■唐井さん

私は合唱団に入っているんですけど、役員ではない人も合宿とか普段の練習とかでボランティアとしてみんなのために手伝ってくれていることが、私が見つけた“結い”だと思います。

### ■平野くん

僕が住んでいる地域では白川郷のように盛大な取り組みはないですけど、マンションなので自治会でゴミの分別をしたり、ラジオ体操をしたり、子ども会でいろいろなイベントをしています。

### ■今川くん

朝早く起きて廃品回収をする時、地域のダンボールとか、新聞とかペットボトルとか雑誌とかを分別して一緒にリサイクルに出すということが、僕の中の“結い”だと思います。

### ■伊藤さん

私の近所はみんなが家族みたいな存在で、自分の家でおかずを作ったら近くの人に分けたり、私が学校から帰ってきたら「おかえりなさい」を言ってくれる、とても優しい人ばかりなので、これも“結い”と似ているのかなと思いました。

### ■川井

それではまとめをさせていただきたいと思います。私は、子どもさんが言っている、自然、森、そして人と自然との繋がり、人と社会との繋がり、もう少し小さくすると人間と人間との繋がり、そういうものを大切にしなくちゃならないんだ、人の暮らしがこの地球の環境とうまく調和し、そして文化の違う人、多様性をしっかり認め合うような社会づくりがこれから必要になるんじゃないかと思っています。そのために地球の規模で考えて、そしてそれを、地域を起点にして行動する、よくグローバルと言われておりますが、もっともっと、運動として前に進めていくべきなんじゃないかなと思いました。

子どもさんの視点というのは、非常にまっすぐで、直線的だと今日感じたんですが、自然を大切にということ、地球を汚さない、伝統文化や人の繋がりを大事にして行動しようといったメッセージをいただけたのじゃないかと思っています。

実はこれまで6回行ってきた「フォーラム宣言」を今回は基本的に作らないと決めておりましたが、先ほど広田さんからご紹介いただきました、午前中の議論を取りまとめた「私たちのフォーラム宣言」をもとにして、多少改訂を加え、内容を簡潔にして文体を統一し、さらに子どもさんたちの話を加えて、これまでの「フォーラム宣言」に準じるものとして「私たちのフォーラム宣言」とさせていただきます。どうもありがとうございました。



フォーラムのまとめとして、午前中のグループディスカッションの話し合いの結果も参考にして、コーディネーターの川井秀一先生によって「(私たちの)フォーラム宣言」がまとめられました。

# 第7回 (私たちの)フォーラム宣言

私たちは、愛・地球博の理念を継承し、これまで開催したフォーラムを通じて、里山が人と自然をつなぎ、地域づくりの場として重要であること、また自然を持続的に利用する生き方の大切さを学んできた。とくに、第5回及び第6回フォーラムでは、議論の積み重ねと共に、先人の知恵に学び、新たな社会の構築に向けて、いま私たちにできることから行動を起こしていくことの大切さを再確認した。

このフォーラムでは、子どもたちと共に、人と自然の未来に向けて、どのように行動すべきかを考え、議論した結果、以下の宣言を行う。

- ① 里山をベースに、地域の中での循環や、地域同士のつながりのあり方を考える
  - ・春夏秋冬、里山へ行き、汗を流す
  - ・里山の保全に努め、その効果を明らかにする
  - ・週に一度は家族で食卓をかこみ一釜のご飯を食べる
  - ・子どもたちに自然体験ワークショップを行う
- ② 温暖化問題への対策や新しいエネルギーのあり方を考える
  - ・資源とエネルギーを大切に使う
  - ・温暖化による影響を隣人や周りの人たちに伝える
- ③ 海外と日本の知恵や生き方に目を向け、国際的なつながりを考える
  - ・子どもの目線で「おなじ」と「ちがい」に気づく
- ④ 先人の知恵に目を向け、世代を超えたつながりを考える
  - ・歴史と伝統文化を学び、受けつぐ
  - ・身近な人に聞き、身近な人に伝え、そして実行に移す
  - ・子どもたちの夢を育てる

今後これらを広く発信し、社会や暮らしを見直す決意を育みながら、自ら具体的に行動していくことを約束する。

平成 25 年 10 月 12 日 第 7 回人と自然の共生国際フォーラム 参加者一同



第7回  
人と自然の共生国際フォーラム

The 7th international Forum on Interrelationship between Nature and Human Beings

## 人と自然の共生国際フォーラム実行委員会

あいち海上の森センター 国際フォーラム事務局

〒489-0857 瀬戸市吉野町304-1

**TEL** 0561-86-0606 **FAX** 0561-85-1841 **Eメール** kaisho@pref.aichi.lg.jp

人と自然の共生国際フォーラム

検索

[www.mu-academy.jp/forum](http://www.mu-academy.jp/forum)